手先の動きと子どもの感情⑫

清水エミ子

今年の四月ほど、三百六十五日、一年間という月日の流れの早いことに気づかされたことはなかった。カレンダーが十二枚しかないことを、あらためて考えてみたりしてしまった。それはなぜだろう。

〃心〃それも〃幼児の心を正しく知りたい〃と強く感じてから、平面的な心をとらえるのでなく、立体的な心、本物の心をとらたえい、そして正しい保育、幼児の成長に役立つ保育がしたいと願いながら、心のあらわれを見つめることに努力しはじめた。

幼児の心のあらわれを、からだ全体、頭だけのあらわれだけにたよっていてよいのだろうか？　立体的に心のあらわれをとらえる場所（あらわれの個所）はないものかと、幼児をながめなおしてみることに気づいた。

いつも見ている場所でなく、見ているようで見落としている場所、見ている気になりすぎて一向に見ていないところをさがしてみはじめ、子どもたちが一番よく動かし、あらわれもはげしい部分、手、指先、に気づいた。

気づいて暗中模索しているうちに、アッという間に一年が過ぎてしまったのだ。

何ひとつ、つかむことができずに、

何ひとつ、はっきりしたことが分からずに……。

しかし、幼児（子どもたち）は思いがけない部分でも心をはっ

きりあらわすのだということだけは、学ぶことができた一年だった。ひとりひとり、親が違うように、指先、手先の表情も違っているが、個性的に、よくいろいろのことを、私に伝えてくれた。

一年間、子どもの手先に魅せられて、指先のあらわれに親しみを感じた私は、子どもたちと手をつなぐ、子どもの手から物を受けとる、子どもの手に何かを渡すなどという、何気ない、何の変哲のない行動にも、今までにない親しみと愛情を感じ、私の手の平の中に息づく小さな手の平、握り合った手に、何にもたとえようのない重みを感じるようになった。

手をつなぎ、手に渡し、手から受けとる、この時に手と手における大きな対話が生まれる。

言葉ではない対話をしなくてはならない。子どもからの語りかけ、それを聞きもらしてはならない。私からの語りかけも、正しく伝えなくてはいけない、という気持で接することができ、私には今までにない、楽しい、重みのある一年間、子どもと手と手でたくさん話し合えた一年間だったような気がして、今年の四月を迎えた。

一年間の反省と、ことしのスタート

最初の計画

○手先の表情を数多く見ること。

○手先の表情のよみとりを、間違えず他のことがらにスムーズに結びつける。

○実態を見つめる時、具体的に数多く見て多くのケースから学ぶ。そして心をどう受けとめるか。

この結果

○ケースを多く見ようとする気持が強かったために

・共通性（ケースの中での）をつかまえることができなかった。

・ケースを多く見ることに気をとられ、違いの多くあることは気づいたが、違いの中での類似を考え、みつけることが少なかった。

○はっきりしたあらわれ、表情を求めたい気持が強かったためか

・無計画な刺激に対する表情を追いすぎた。（思いがけないできごとや、初めて経験する活動の時など）

・手先、指先の表情（あらわれ）を豊かにするための保育のあり方を考えなかった。

・いつも（平素）くり返される、何ということのない、遊びの中での手先、指先のあらわれを見ていない。

など、考え出せばきりがないのだが、今一番強く反省させられることは、保育の中であらわれてきた手先、指先のよみとりを、どのように保育に役立てるか、ケースをどう受けとめ、子どもたち

への成長に役立てるかを考えて、手先に挑戦していかなくてはならない、ということだ。

ケースのられつに終わってしまうのなら、やらない方がいい、何の役にも立たないことを、いやというほど反省させられた。私の園が、一年保育しかいないため、昨年のつみ上げができないのが、何といっても残念なのだが、ないものねだりしてはいけないので、新入園児で見なおしをしながら、たしかめていくことにした。

まず、手先のあらわれのよみとりの方法を、具体例からたしかめてみることにし、

無意識のあらわれが、指先、手先のあらわれであることをふまえ、

子どもたちの無意識を育て、表情豊かな生活を楽しめる子どもにするために、指先、手先の表情を豊かに育てる。そのための具体的活動（遊び）を考える。

毎日くり返される、活動や遊びの中での手先、指先

1　時間つぶしのために遊んでいる時の指先

入園当初の子どもたちは、まだひとりで遊びださない。（外見は遊んでいるように見えても本当の遊びではない）どうしてよいか分からず、時間をつぶすため、何にもしないでいるわけにいかないためにする遊びが多い。

何となくさわったからいじっている。こんなときの指のあらわれは、眠くなった乳児の動きのように、なんともトロイ動きとあらわれである。（疲れきっているような動き）

写真　(1)

イ、絵本立てのところを通りすがりに、さわった絵本を手にしてつかみとる時も、のろりのろり、顔やからだ全体での行動は、それほどのろのろしてみえず、活気はないが普通、という感じであるが、手は全体的にのろのろのあらわれだった。入園五日目。（写真(1)）

ロ、どこからかころがってきたボールが、足にさわったので、拾い上げていじっている指。家が近所のため、いつもいっしょに園内を歩いている広田、いさお、のふたり。

けさもホールをブラブラ手をつないで歩いていた。顔の表情は何の変わりもなく静かだったが、ドッヂボールがふたりの足先にころがってきてとまった。

広田がボールに気づく時に、あいている片手でボールをさわった。(なでた)それを見ていさおも手をふれて、一個のボールをふたりでかかえていた。はからずもこの時、ふたりの指先はボールのはだを、ポンポンと軽くたたいていたのだ。(写真(2)(3)(4)(5)(6)(7)

指先は、何となくさわったボールを喜んでいる。安心してボールをだいていることがよくよみとれた。フラフラ、ブラブラ歩いていた不安が、ボールをかかえたことにより、安心したということを、からだや顔からはよみとりにくかったのだが、ボールにふれている指先は、ポンポンとリズミカルに、喜びを反応していたのには驚いてしまった。

私は、ふたりに近づき、そっとさそいの言葉をかけてみた。

◆遊びへのはたらきかけ

保「広田くん、そのボール重い?」

広「軽い」と答えはぶっきらぼう、

いさお「ゴムだよ、これ、はずむよ」と答えながら、指先は前よりややはげしく、ポンポンとボールをたたいていた。

この様子で、少してれているが、私が近づいたことを喜んでい

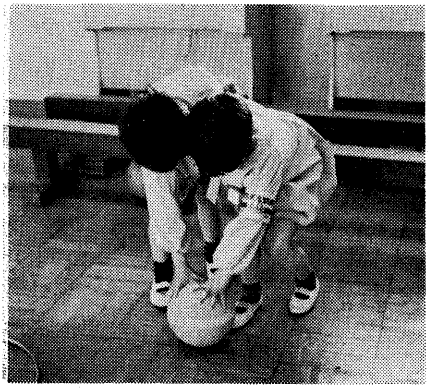


写真 (2)

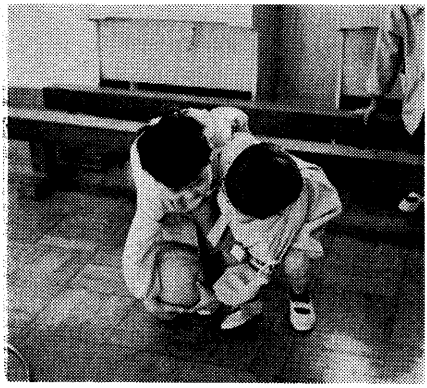


写真 (3)

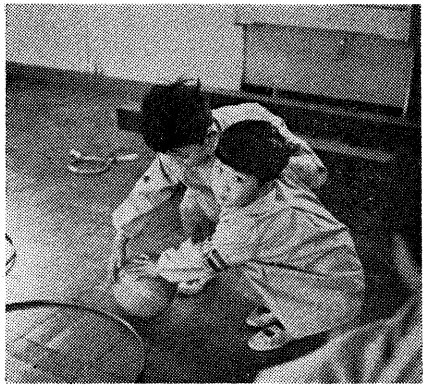


写真 (4)

るな、とよみとったので、保「はずませてみない、いっしょに」といってみた。

いさお「いいよ、広田君いいだろう？」と広田にも同意をもとめ、ボールをいさおひとり胸にかかえた。そしてポンポンと二、三回はずませた。にげていくボールを私が受けとり、二、三回はずませ「広田君にこんどあげる」と声をかけ、私が両手でボールをかかえて渡してみた。

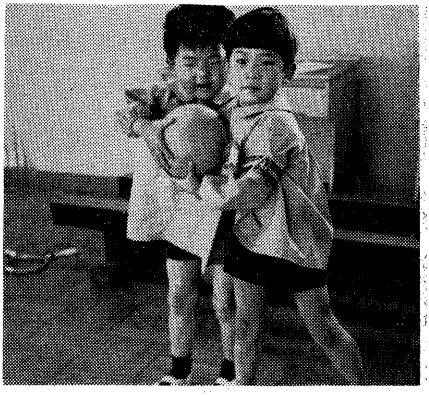
広田はボールをもう受けとってよいか、マゴマゴしながら、指先を五本きちんとつけてみたり、はなしてみたり、手首を上げたり下げたりして、少し不安をあらわしていた。そこで私は広田のからだのうしろに回り、うしろから広田の手先を軽く私の手の平でつつみこみ、その上にボールをのせてみた。

ピクン、と広田は指先を動かし緊張を伝えてきたので、いっしょにポンポンとついてみた。

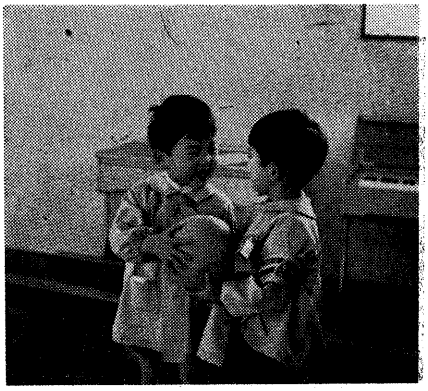
いさおが「こんどはぼくの番」とボールをおいかけてとりにいった。

いさおにボールを渡した広田は、ホッとため息をつき、上衣の裾をつかんでいさおのボールつきを見ていた。（写真⑧）

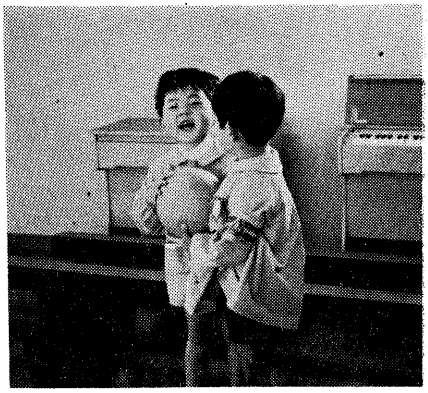
三分位、交替でボールをついたが、広田の指は二回目からは緊張がとけ、自然の指のひろがりでボールをつかまえていた。（写



写真（5）



写真（6）



写真（7）

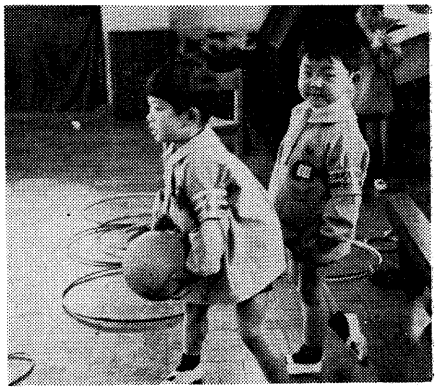


写真 (8)

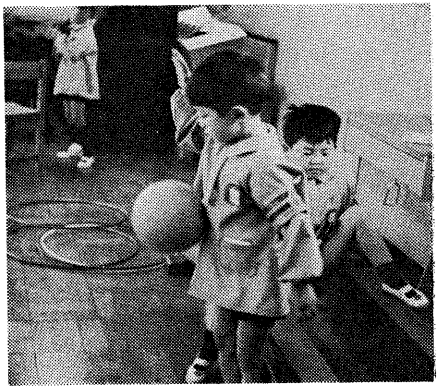


写真 (9)

写真 (10)

真(9)(10)

このふたりは、四、五日続けて、朝登園するとすぐ、ボールなげを始めていた。つくことをいつからやめたか気づかなかったが、ボールを投げあいながら幼稚園での遊びに入りこんでいったようだ。

遊ぼうとして遊んだのではない経験を、保育者がちょっと助けることによって、自分から遊ぼうとする遊びに変わっていくことを、はっきり見せつけられた。

ハ、先生から渡されたぬいぐるみをいじっている指と手

何をするでもなく、保育室の机にもたれてほかの友だちの遊びを目で追って楽しんでいたいく子が、通りかかった私の目についた。

指先は机の上をたよりなくなで回し、からだをその机にもたせかけている。顔は友だちの遊びを見ているので笑顔に近かったが、机をなでる指は不安でたよりない表情をしていた。

そこで私は、意識的に近づいてみた。言葉はかけずにそっと近づいた。いく子は私を目で追ってきた。それを見とどけて、私は近くのママゴトコーナーから動物のぬいぐるみをとり上げ、いく子の胸にだまってくっつけ、笑いかけてみた。

写真 (11)

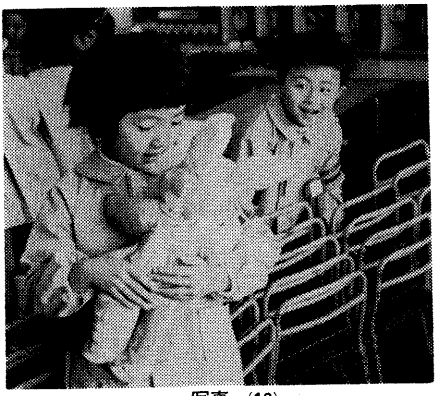


写真 (12)

机をなでていた手でなく、片方のあいていた手（からだの横にぶらりと下げられていた）をのろりのろりともち上げてきた。不安だということを手先いっぱいにぶら下げて、重たげに手をもち上げて、ぬいぐるみの足にそっとあてがってきた。（写真⑪）

そこで私は「この人形、ぴょこたんて名前がついてるのよ。おもしろい名前でしょう」と関係のないことを話しかけてみた。いく子はにたっと笑ってから、人形の足にかけていた手を、のろのろとおなかの辺にもち上げた。そして前よりしっかり、ぬいぐるみを抱きかかえた。（写真⑫）

次には、机をなでていた片方の手で、ぬいぐるみの手をそっとさわって動かし始め、ぬいぐるみを抱いて一、二分、へやをブラブラ歩いていた。（写真⑬）

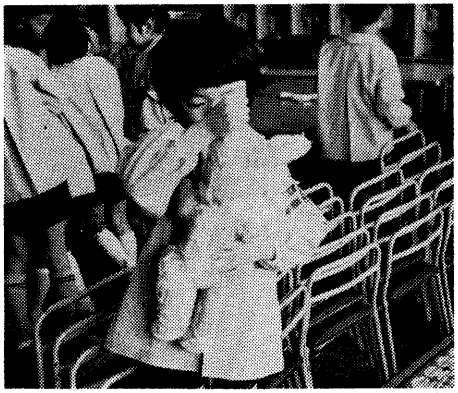


写真 (13)

それからいく子は、立ち止まった所にじっといつまでもいるということがなくなり、何か物を持って動いているようになった。

物を媒介として集団になじんでいくタイプだな、と考え、だんだん変化のある物、遊具を渡してゆかなくては、いく子は集団にうまくとけこまなくなってしまうと気づいた。

お手玉を渡した時のいく子は、一日中お手玉をぐにゃぐにゃいじくり、握りしめて過ごした。はじめは、ポケットに入れずに外に出しては手でいじっていたが、次にポケットにお手玉を入れ、

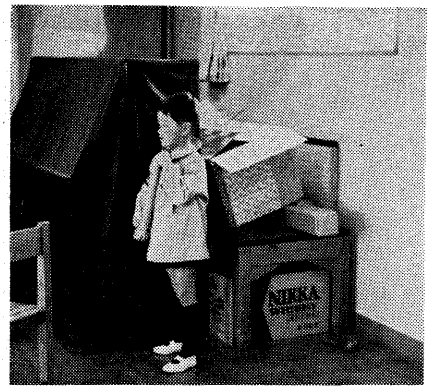


写真 (15)

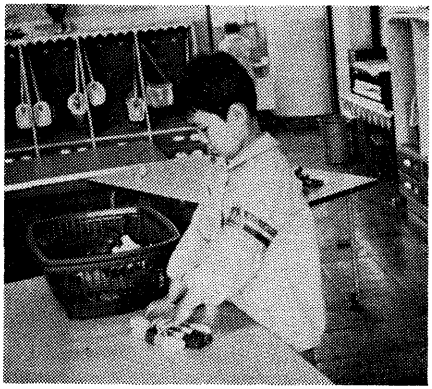


写真 (14)

ポケットの中でぐにゃぐにゃいじっていた。

集会―一斉的な活動をしている時も、時々片手がポケットに入っていた。

物をいじる、つかんでいることの安心が必要な子どもたちが、まだまだたくさんいること、無理に友だちの中や、保育者の遊びにさそいこむことをあせらずに、ひとりでそっと遊具、物をいじくり、楽しんで、自分の力で集団に入ってゆくことを待つべきだと、この例を見つめて気づかされた。これも指が知らせてくれた要求ではないだろうか。（写真(14)(15)）

二、友だちのしまい残しを、そっといじっていた指

保育室の片すみで、床におしりをつけて、四、五名の男児がブロックキャップで、いろいろなものを作ってはこわし、作ってはこわし、くり返して遊んでいた。ロケット、ジェット機などを完成させると、それを持って男児たちは、ブロックのカゴをそのまに、ホールの方へかけ出していった。

床にはブロックキャップが、数個ちらばっていたし、カゴの中にも残りのブロックキャップがいくらか入っていた。

この場所から、二メートル位離れた所の机によりかかってやすひろはブロック遊びを熱心にながめていたのだが……。やすひろは積極的に遊びに参加できない子だった。保育者や友だちにさそわれて、のそのそと参加する状態だった。

参加すれば楽しそうに遊んではいるのだが、遊び出す、参加するまでが、のろのろ、ぐずぐず、遊びたいのか、遊びたくないのかはっきりしない表情なのだ。こんなやすひろの指先、手先を見つめてみると、そのようすもうなずくことができたのだ。

誰もいなくなったブロックの方へ、足を運び始めようとした時の指先は、爪を立てて机をがりがりひっかいていた。そしてその

手をとめて、まわりを見回し、今までブロックキャップで遊んでいた友だちがいないのをたしかめた。

カタツムリがはっていくように、ブロックにすりよっていった。この時は片手が握りしめられ、片手はひろげて床にペッタリとはりつけられていた。そして握りしめたげんこつは、時々意味もなく床をたたいていた。

不安なのだ。いつ友だちが帰ってくるか分からないということと、どうやって遊ぼうかという不安が入りまじっているようだった。

二個のブロックをそっと握って、はめこんでいた。この時の指先は、第一関節だけを使ってつまみ上げ、さしこんでいた。

カゴの中からブロックキャップをとり出すのでなく、床にちらばったものを拾い集めて遊ぶだけだった。四個目のブロックを拾い上げる時も、第一関節だけしか使っていなかった。

さしこみ、重ねてからの遊び方は、やはり第一関節（中指、人さし指、くすり指の三本）だけを使って床をすべらせていた。

保育室の入口に、先に遊んでいた子どもがブロックを持ってかけこんで来る気配があったので、やすひろに声をかけてみた。

保「四個位つなげて、先生といっしょに何か作ってみましょうか」

Y「うん、いいよ。でももうないよ」

保「カゴの中の、使えばいいじゃない」

Y「そうだね。これ使ってもいいの」

保「いいのよ。みんなのですもの」ここまで聞いてやすひろは、親指と人さし指でブロックをカゴからつまみ出した。

保「なににしましょうか」

Y「……」

保「さっきの友だち、飛行機作ってたから、あの飛行機うちおとす鉄砲作りましょうよ」

Y「うん、でもだいじょうぶ？」

保「やっちゃいましょうよ。びっくりするわよ」

私は、ピストル型にブロックキャップを組み立て、一、二個やすひろにつぎたしさせて、完成するように助けた。

でき上がった鉄砲（ピストル型）を私が持って、やすひろに

保「貸してくれる？」

Y「いいよ」

私は、前にブロックで飛行機を作った男の子を、ホールに追いかけた。この時やすひろの手をつないでいっしょにいき、

保「バンバン、バビュン！」とやってみた。

四、五回くり返してから、私は鉄砲をそっとやすひろの手に持たせてみた。ピクピクと指先を動かして、鉄砲を受けとり、声を出さずにうつまねをしていた。

友だちのしまい残しをそっといじりながら、完全ではないが、保育者の助けをかりてまじわり始めていったようだ。

以上今回は、くり返しくり返し遊ばれる、誰でもがする、遊び場での指先のあらわれ、表情を見つめてみた。

その中でも、さわろう、使おうとしての表情でなく、〝遊ぼうとしない、なんとなくさわった時のあらわれ〟をとらえ、そのあらわれを、保育者が受けとめ、助言したり、いっしょに参加したりしてみて、心の動きの変化をどのように指先が知らせてくれるかを、たしかめてみた。

絵本、ボール、ぬいぐるみ、ブロックなど、いつでも保育室にあるものに対する、無意識での参加、不安定なあらわれから、助言や、くり返しの回数によって自信をもち、力強いあらわれになることが、わずかであるがくみとれたようだ。

（大田区立蒲田幼稚園）

保育者養成の諸問題　〈注〉

1　柴谷久雄「幼児教育の原理」（幼児教育学全集1　小学館　一九七〇）

2　松村康平「子どものおもちゃと遊びの指導」（保育学講座7　フレーベル館　一九七〇）

3　松村康平「児童理解の方法」（誠信書房　一九五八）

4　松村康平「児童臨床者の資質要件」（石井哲夫編「児童臨床心理学」恒内出版　一九六九）

5　松村康平「児童臨床学」（お茶の水女子大学家政学講座2　光生館　一九六九）

6　お茶の水女子大学児童臨床研究室では松村康平氏の指導のもとに、教育、研究、養成を同時的に展開している幼児集団研究活動を行なっており、教育、研究、養成のそれぞれに成果をあげている。